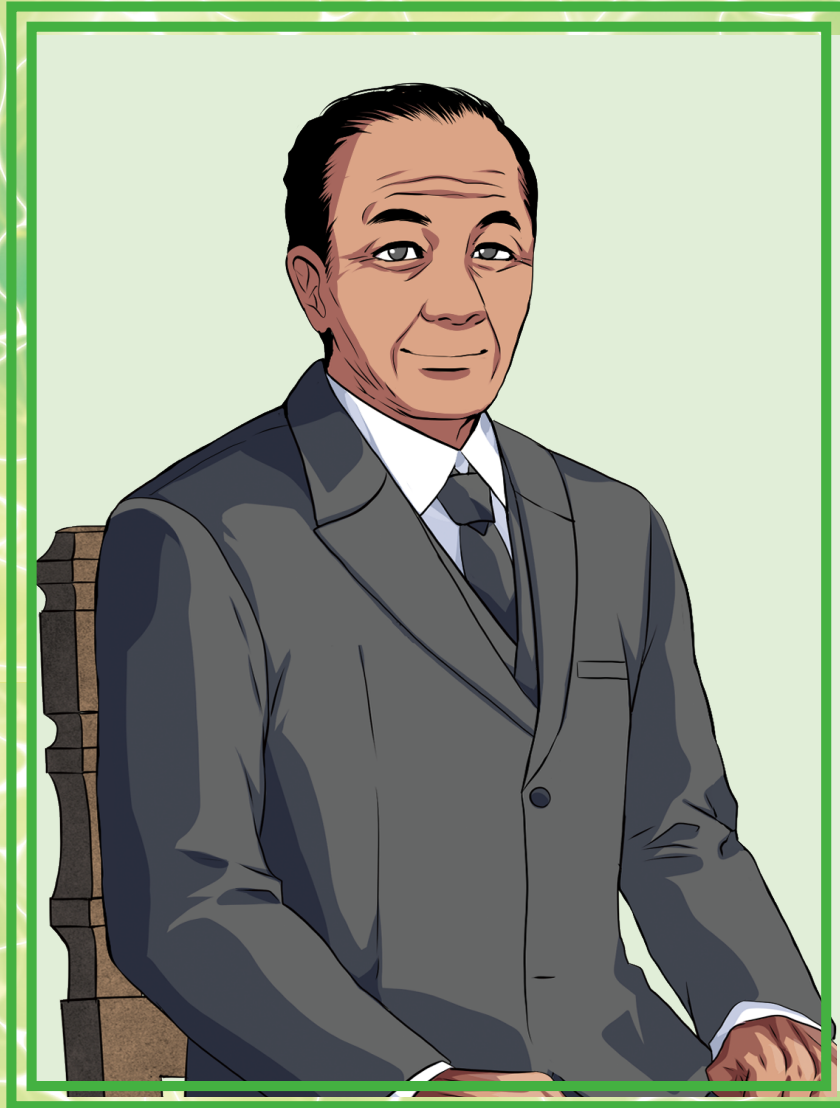


こうちょうせんせい
トットちゃんの校長先生

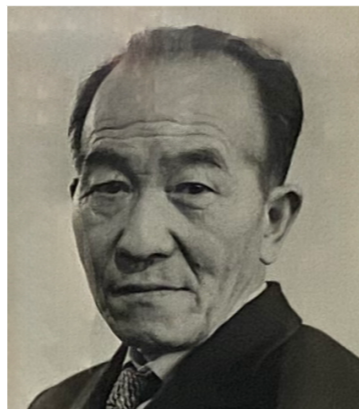
こばやし そうさく ものがたり
小林宗作 物語



にほん つた
リトミックを日本に伝えた
ひがしあがつままちしゅっしん ようじきょういく せんくしゃ
東吾妻町出身の幼児教育の先駆者

ふたりの「そうさく」

こうちょうせんせい トットちゃんの校長先生 こばやし そうさく ものがたり 小林宗作 物語



めいじ ねんいわしま う こうちやし そうさく 明治26年岩島で生まれた小林宗作

にほん どうにゅう こ した しょうがい リトミックを日本に導入、子どもたちに慕われたその生涯は

小林宗作は、明治26年東吾妻町・三島（旧岩島村）で、農業を営む小林弥十郎の5人兄弟の末っ子として生まれました。豊かな自然の中で育ち、家の前の大竹川のほとりで指揮棒を振り、歌を歌って遊んでいたそうです。



宗作の遊んだ大竹川

明治40年下仁田へ移り住んだ宗作は、そこで小学校の代用教員となりました。この頃、下仁田小学校を会場にして、東京から来た音楽家の演奏会が開かれていたそうです。歌が好

きな宗作は、刺激を受けたのか音楽教師を目指します。

明治44年18歳で上京し、小学校に勤務しながら、大正5年23歳で東京音楽学校（現東京芸術大学）へ修学しました。この後、小学校の教師になり、妻豊子と出会います。

念願の音楽教師になった宗作でしたが、当時唱歌を教えることが中心だった音楽の授業に違和感を覚えるようになります。

公立小学校から私立成蹊小学校に移った宗作は、クラシック音楽に親しむなど音楽環境に恵まれている子どもたちに対し、唱歌を中心とした授業でいいのか悩むことになりました。

また、幼児期には誰もが持っている感性を育てて伸ばす音楽指導は、日本の音楽教育界では難しいのではないかと思いはじめました。

リトミックとの出会い

宗作は小学校を退職し、新しい音楽教育法を求めてヨーロッパに旅立ちます。スイスで国連事務次長だった新渡戸稲造と面談し、リトミック（音楽を体全体で感じ、表現する能力を育む音楽教育法）の存在を教えられ、パリでリトミックの発案者ダルクローズの指導を受けました。

帰国後、成城学園幼稚園などのリトミック指導教員になり、日本にリトミックを導入した初めての指導者となりました。

宗作の幼児教育や音楽に対する追求の情熱は止まらず、2度目のヨーロッパ留学に行き、ダルクローズ研究所より、日本リトミック協会設立の正式許可を取得しました。

トモエ学園設立

帰国後、理想の教育実現のため、昭和12年トモエ学園を設立、校長となりました。黒柳徹子さんの『窓際のトットちゃん』で有名な「校長先生」の誕生です。

子どもを自然の中で伸び伸びと育てるという理想に燃え、音楽教育だけでなく、音楽教育者として情熱を傾けました。資金不足で廃車になった電車を校舎にしていたが、子どもたちにとっては、「電車の学校」として大人気だったそうです。

トモエ学園の授業は、普通の公立小学校とは違ったものでした。中でもリトミックの授業は毎日あり、講堂で宗作がピアノを弾くまわりを、子どもたちは生き生きと動き回りました。



トモエ学園の精神を受けついで国立音楽学校附属幼稚園の林浩子園長は、小林宗作の子どもに関わりについてこう記述しています。『「はじめにリズムありき」この言葉は、小林宗作先生が大事にしていた言葉です。

2度のヨーロッパ留学を経て、日本で初めてリトミックを幼児教育に導入し、普及させた小林宗作先生は、リズム教育は総合的に進められるべきであると、リトミックを主軸とした『総合リズム教育』へと発展させました。

単に音楽性を培うためだけでなく、心と体を調和させていく人間教育として『総合リズム教育』を位置付けたのです。その中で、小林宗作先生が特に大事にしていたのは、子どもが自然の中で存分に

ふたりの「そうさく」

遊び、自然と対話することでした。風や波、落ちる力、弾む力など、万物はリズムで動いており、そのリズムを子どもが全身で感じ、気づいていくことを願いました。

また、『自然の中に子どもを開放し、共に食べ、共に歌い、共に動く生活には音楽が湧き出て来る』とも述べ、自然の中で子ども同士が関わる中で心や体が揺り動かされること、そして、そこから現れ出てくるものが表現であり、音楽であるとしたのです。

自然の中で育ち、森を揺らす風や小川のせせらぎの中で指揮棒を振って遊んだ宗作ならではの気づきだったのかもしれない。



第二次世界大戦の勃発

宗作の理想とする教育の実現は長くは続かず、第二次世界大戦が勃発、昭和20年の空襲でトモエ学園の校舎は消失してしまいました。校舎が燃える様子を見ながら、宗作は「次はどんな小学校を作ろうか」と、息子の巴氏に語りました。

いわしま つかい 岩島への疎開

終戦の年、宗作はトモエ学園の児童数十人を連れ、故郷（旧岩島村岩下）に疎開しています。宗作が養子になっていた姉の嫁ぎ先金子家を頼ったのです。疎開先の近くにある福田屋旅館には、児童の家族が多い時で4世帯泊まっていた。その庭には、トモエ学園の児童が登って遊んだと伝わる榎の木が、今でも元気に残っています。



福田屋旅館の榎

トモエ学園の児童が疎開に来ていたことを覚えていらっしゃる方がいます。疎開先の隣りに住んでいた武井潔さん（当時10歳）です。

おねしょをした子がいたのか、よく堀に布団が干されていたこと、トモエ学園の児童と川向の根古谷地区の公民館で地元の子どもた

ちとの交流があったことなどを教えてくれました。食べ物には苦労したようで「干し柿なんかを食べながら外に出ようとすると、『かわいそうだから食べているところなんか見せちゃだめだ』と、母親に叱られた」というエピソードも話してくれました。『岩島村誌』には「岩下の机には『ともえ学園』がピアノまで持ってきて疎開していた」とありますが、にぎやかな音楽が聞こえていたとのことでした。



当時のトモエ学園の授業中の写真

宗作は、厚田烏帽子地区に畑を開拓し、すぐに食べられる蕎麦を栽培しようとした。児童をつれて川を渡り、途中親戚の家で休憩し、うどんの汁を飲ませてもらい、山道を登って開墾地まで歩いて行ったそうです。豊かな自然に囲まれた榛名山のふもとで新たな小

学校建設も、宗作の頭にはあったそうですが、息子の勧めもあり、戦争が終わると東京に戻りました。

せんご ようじきょういく じんりょく 戦後の幼児教育に尽力

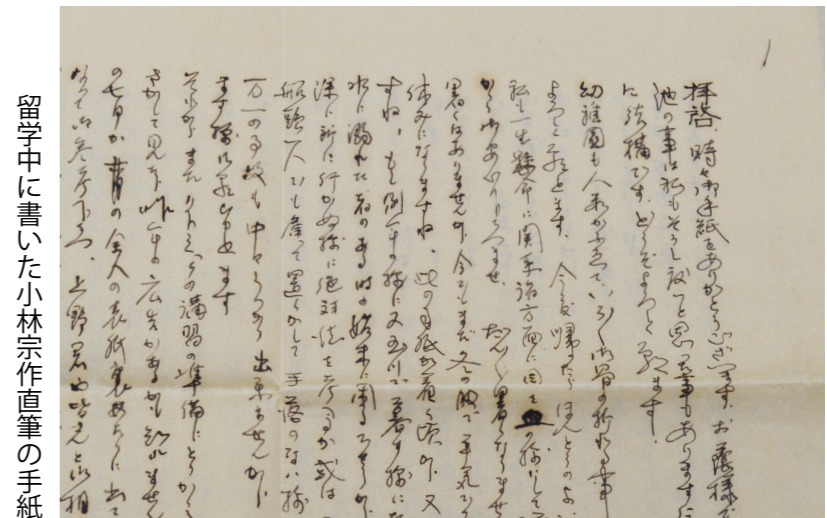
昭和24年国立中学校、高校、音楽学校で宗作は講師を務め、その後、国立音楽大学附属幼稚園の園長になり、幼児教育の重要性とリトミックの普及に尽力しましたが、昭和38年脳溢血のため亡くなりました。69歳の生涯でした。

ようちえんちようじだい すがお 幼稚園長時代の素顔

東吾妻町五町田に住む佐藤浄子さんは、国立音楽大学の学生だった時に、小林宗作に直接指導された貴重な教え子です。「いい先生がいるから」とくにたちおんがくだいがく しんがく すず 国立音楽大学に進学を勧めたのは、教員だった父親だったそうです。大学では幼稚園専攻で、午前中はピアノのレッスンや音楽の講義で、午後は幼稚園での実習がありました。「小林先生が子どもに接する時はいつもやさしい目をして、子どもの目線に合わせて会話をしていました。リ

トミックの時は音の高低や早さを変えることによって子どもが自由に動物になりきったり、雨や風のさまを表現したりするのです。ピアノを弾きながら子どもの表現に一言声をかけてほめることを忘れませんでした。また、『子どもは自分の計画の通り動かすんじゃない』とよく言っていました。例えば、リトミックでピアノを弾いたら、子どもが自然に動き出せるようなリズムで、自由に動けるようにしなくちゃいけない。音楽は耳で聞きますが、心で聞くようにすることです。心で感じるってことを体験するのは難しいですけれどね。

子どもには『あれしちゃだめ、これしちゃだめ』ってことはなくて、『何をしてもいいんだよ』って言うんです。それでも、けんかをする子ども



留学中に書いた小林宗作直筆の手紙

もを見たことがなかったです。普段から『何をしてもいいよ』って言うけど、子ども同士で何かルールができるんじゃないかな。気持ちよく何でもやるから、不満がなくて過ごせるのでしょ。幼稚園では、ほとんど外で過ごすんです。全員で部屋の中で折り紙をしたり、歌を歌ったりするってことはなくて、子どもが心からしたいことをさせるよう補助するのが、幼稚園教諭の役割だと

おっしゃってました」当時を知る佐藤さんは、恩師との思い出をそう語ってくれました。

そうさく りねん げんたい 宗作の理念は現代に

映画「窓ぎわのトットちゃん」の公開をきっかけに、東吾妻町では宗作の教育理念を学ぼうと、令和6年国立音楽大学附属幼稚園林浩子園長によるこども園・保育所職員の講演が行われました。また、「小林宗作氏を顕彰する会」が発足し、林園長の一般向けの講演には、町内外から多くの方が訪れました。宗作の理想とした教育は、今でも多くの人の共感を得ています。多様性を尊重する時代だからこそ、宗作の教育理念がますます重要になってくるのかもしれない。